継承の鬼

今西　克己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
継承の鬼

【Ｎコード】
Ｎ３２０４Ｔ

【作者名】
今西　克己

【あらすじ】
このくだらなく秩序のない世の中を何とか浄化せしめんと鬼であるダイワはあれやこれやとするのだがなかなか上手く行かないもので……

戦場、尊厳死、ダイワと御大

内戦地帯にて

木造の家屋の壁を背にして、屈強な男が座禅を組んでいる。もうかれこれ2時間は経つ。
男はなにやらお経のようなものを唱えている。男が座禅を組む前に何をしていたのかというと少年をひとり殺した。
バットよりも二回りは太い木の棒で後頭部に幾度と無くそれを振り下ろした。
グチャ……グチャ……ヌチャ……ネチャ…………
原型をとどめなくなるまでしつこく叩き続けた。そいつは叩いている途中で命を落としていただろう。
カシタゴ――それが少年の名前だった。まだ十代前半の幼さの残る顔をした少年であった。
他民族であり、外国人である私に処刑させたのはリーダーの最後の優しさ。
「ツシマ、奴らが来るぞ」
ツシマより年下であるリーダーのフカブはいった。
このジャングルの片隅にある作戦小屋の場所をカシタゴは敵に内通したのだ。報酬は日本の平均月収の二十分の一程の額、それでもこの国においては高額である。
カシタゴは家族の一番年下の男であり、父と二人の兄はすでにこの世から解放されている。残されたのは母と五歳になる妹のシェンだけ。内通の報酬があったところで当座をしのげるだけだ。
でもその報酬ですら家族にとっては貴重で、シェンもあと数年もすれば身売りされていくだろう。醜い性癖を持った先進国の男達がこの国に来て幼女を買う事は公然と知られている。ちなみに母は売春婦である。

「敵は8名リーダーは逃げてください」
監視役のミネがいう。
ツシマもそうするようにフカブに目で合図をする。フカブは頷きジャングルの奥へと姿を消した。落ち合う場所は決めてある。あくまで生きていればではあるが……。
ミネとツシマは小屋を出て全く逆の方向へと動いた。まもなくロケット砲により小屋は破壊された。轟音が響いたがツシマは耳栓をしているメイドインジャパンの愛用品だ。
ツシマは相手のリーダーを即座に見抜いていた。ツシマから見てロケット砲を発射した男の右に立っている左足の不自由な男だ。ツシマは射撃の名手であり、すぐさまその男の頭に狙いをつけた。
なぜそいつがリーダーであると判断したのか？
それはロケット砲が発射される直前にその男の口元が動いたからだ。
それだけか？
それだけである。戦場では一瞬の判断で命のやりとりが行われる……もちろん自分の判断がすべて正しいとは限らないが死んだとしても自己責任だ。代償が命のというだけ。
ツシマは引き金を二度引いた。一発目はリーダーと思しき男の頭に命中しもう一発はロケット砲を放った男の頭に届けた。頭部は破裂し飛び散る。
すると男の周りにいた残りの六人の男達はわれ先にと蜘蛛の子を散らすように逃げて行く。
今日も愛用のグロッグは手に馴染んでくれる。弾は警察庁の佐島から調達している押収品だ。
この国の内戦の兵士の半分以上は傭兵であり、忠誠心など薄い。自分より相手が強いと判断したら躊躇なく逃げる。それでも傭兵を雇わずには戦力が足りない傭兵天国だ。
たった二発の銃弾で危機を脱出した……スマートなもんだ。
「あーあ」

小屋は全焼してしまっている。面倒だがまたひとつ作らないといけない。
ツシマは念のためもう一発ずつ二人に銃弾をお見舞いして、落ち合う場所へと駆けていった。

ホテルにて

高儀俊一は昨日電話をかけてきた伯父と約束をしていた時間をわずかに送れて伯父の住んでいるそこそこの高級住宅街にある高層マンションのエントランスホールに着いた。伯父の部屋の号数をボタンで押して自動ドアを開けてもらいエレベーターで九階まで上がりそこから十メートルほど歩いて伯父の部屋のドアの前に来て右手の人差し指でチャイムを押すとまもなく伯父が玄関を開け
「良く来てくれた」と覇気の無い表情で語りかけてきた。どこか体調でも悪いのか身体がプルプルと絶え間なく震え続けている。
「お久しぶりです伯父さん。体調が優れないように見受けられますが大丈夫ですか？」
「――――」
眼振もひどく明らかに目の焦点が定まっていない。
「入りなさい」
そう言って伯父は俊一を促し向き直って部屋へと戻っていく。足元がおぼつかず見かねた俊一は肩を貸してベッドに伯父を横たえた。
「すまんな俊一。あれを受け取ってくれ」
伯父は透明なガラステーブルを指差す。会話は意外とすんなりとできている伯父の指先そのままに視線を移すとそこには白い封筒が一通、テーブルの中心に置かれている。
「あの封筒の中にある手紙、俊一がもらってくれ。そしてこの部屋を出て行くんだ」
『遺書』――俊一の脳の浮かんだ最初の言葉だ。それにしても『

もらってくれ』という言い方を伯父さんが選んだことは引っかかる。
「さよなら……俊一」
伯父は真っ直ぐに仰向けになり天井を向くと目を瞑った。睡眠とは違う……伯父はまったく呼吸をしない。
「伯父さん！」
俊一は伯父の身体を揺らしたが伯父からは反応が返ってこない。脈拍も無く、胸に耳を当てても心音も鼓動もない。伯父は人からただの肉塊へとなったのだ。蒼白い肌に穏やかな表情、俊一は生まれて初めて死体を見たがそれはきれいなもので精巧に作られた人形のように思えた。
俊一は冷静に取り乱すことなく伯父の言うとおりに白い封筒を右手で持つと伯父の部屋から去って行く。その翌日、俊一の左胸に鬼の顔のようなアザが浮き出てきた。
「引継ぎ完了ですね」
部屋から出てくる俊一を遠くから眺めていた男が言う。
「さあ、御大の所へと行きますか」
男は運転手のいる国産の白いセダンに乗り込み運転手に命令し車を目的地へと走らせた。

ガチャ、スー、スタスタ……、ガオーン、スタスタ、キュッ、スタスタ……
白いセダンから降りた男は国内有数の高級ホテルのフロントへとかなりの早足で向かった。
「九条春仁様にお会いしたいのですが」
「失礼ですがお客様は……」
フロント係の話しを遮るように男は財布からシルバーのカードを取り出す。カードを見た刹那にフロント係の表情が硬直した。
「大変失礼いたしました」
本当に申し訳なさそうに頭を下げる。
「いいさ、きちんと仕事をしているだけだから」

男は屈託のない笑顔でフロント係の男に気をかけ優しく語りかける。
「九条様はいつもの部屋にいらっしゃいます」
「ありがとう。じゃあ失礼するね」
「付き添いのものは要りませんか？」
「いいよ。どうせついてこれないからね」
男は非常階段のほうへと異常な早足で向かい、先ほど見せたカードを通し非常階段の扉を開け、あっという間にフロント係の視界からいなくなり猫のように足音を少しも立てることなく階段を上がっていく。　あっさりと男はこのホテルの一応の最上階まで上りきると、並んで五棟あるうちの故障中という目印として扉の前に二本のポールが置いてある階数表示の明かりすら点灯していない一棟のエレベータの昇降ボタンをある法則に従って押し起動させる。
扉の開いたエレベーターに乗り込むとすぐに扉は閉まり外見上からは使用停止中の状態へと戻る。男は昇降する階を指定するための押しボタンの上にある上開きのステンレス製の小口の隠し扉をあけてカードを通す。エレベーターは上昇を始め非公表の最上階へと男の身を運ぶ。
男はその本当の最上階に着くと、エレベーターを降りて一番奥の一室へと早足で向かいコンコンと二度のノックをする。
「どちら様ですか？」と若い女性の声が耳に届いた。
「ダイワです。ダイワタケルです」
「お待ちしておりました。どうぞお入りください」
「はい。了解しました」
ダイワは敬礼をしてカードキーを通すと開錠のしるしとしてシューベルトの『魔王』が流れる。どういうセンスでこの曲をあの人は選んだのが問い詰めてみたい。
ダイワが持っているシルバーのカードは実はこのホテルの万能キーである。だからといってフロント係はそのことを分かっていたわけではない。オーナーからの指示で、このようなカードを所持して

いる来客があった場合には何も言わずとにかく失礼のない対応を心がけ、頼まれたことはなんとしても従うようにと徹底されている。

重厚な扉を開けダイワは洋風の派手な装飾のだだっ広い部屋の中へ入っていく。そこには老紳士と美しく若い女性がおり老人はソファに深々と腰を下ろし女性はソファの横に腕を前に組み背筋をピンと伸ばした姿勢で立っている。

「じっちゃん。また女ができたのかい？　相変わらずお盛んなことですな」

「何を言っとる若造めが孫じゃよ孫」

「マゴという名の女性なんですね」

「そのボケは無理がありすぎじゃ。この男をどう思う？」

老紳士が視線を送ると女性は苦笑していた。

「どうも。はじめまして、マドモアゼル。名前をお聞かせください。私は九条家一の雑用係でダイワタケルと申します」

「由美じゃよ」

老紳士が変わりに答える。

「じっちゃんには訊いてないよ」

「由美が汚れる」

「あっ、ひどーい」

この二人にはまるで年の差を感じられない。旧知の友人のように仲が良い。

「志乃さんの娘さんでしょ」

「ふん、知っておったのか。まったくお主には油断も隙もない」

「お会いするのは初めてですけどね。それにしても綺麗な方ですね」

「お上手ですわね。おじいさまの言われたとおり面白い方ですわ」

「声もお美しい。貴女の声を聞けただけで私は生きていて良かったと存じます」

「こら、タケル。こいつはお前にはやらんぞ」

「えっ、幸乃さんはいいんですか？」

「うん。もちろん駄目じゃ」

「そんな殺生な……。九条家にこんなに尽くしてるのになあ」
「信頼しても信用するなじゃ」
「ケチ……」
「なんか言ったかね」
「別に……」
「一条家で育てたのじゃよ」
「一条さんはそんなこと一言も教えてくれませんでしたよ」
「自業自得じゃな」
「ぐう」
「何じゃそれは」
「いやですね。ぐうの音も出ないというじゃないですか。だからあえて言ったまでです」
「子供じゃの」
「正直なだけです」
「表裏比興の男のくせに」
「はいはい、そうですか。今度お食事でもいかがですか？」
タケルは透き通る肌のスベスベな由美の手を握った。
「善処しますわ」
握っている手を離される。
「これは脈なしじゃな」
「そのようです」
三人とも笑った。
「さてと、そろそろ本題に入るとするか。由美、買い物に行ってきなさい」
九条はそう言ってクレジットカードを由美に渡す。それを受け取ると由美は部屋から出て行った。二人きりになると二人とも表情を一変させる。
「ダイワ、あの件はどうなった」
「えっと、水飲んでいいですか？　それください」
タケルはグラスに注がれている九条の前に置かれている水を一気

に飲み干した。フランスから輸入した最高級のミネラルウォーターである。
「私は欧州の水はおいしいとは思えません。さてさて、高儀士朗さんは自殺しました。」
「重要なことをあっさりと言うもんじゃな」
「事実ですから。あとこれもください」
タケルはサンドウィッチに手を伸ばした。
「パサパサだ。街ならこの一切れで一人前は余裕で買えるんですけどね」
「大量生産の物は口に合わないんじゃ」
「ベーカリーショップに行けばかなりのクオリティのサンドウィッチが買えますよ」
「参考程度に訊いておく。それで後継は誰になるんじゃ」
「士朗氏の甥の俊一氏です。手紙は無事に彼の手に渡っております。それが士朗氏の尊厳死の条件でしたし最低限の仕事はしていただきました」
「器としてはどうなんじゃ？」
「士朗氏に勝るとも劣らない漢です。だから士朗氏の尊厳死を受諾わけですからね」
「お主は士朗氏をかなり信用しておったのにな」
「ええ、しかしながら奥様が亡くなられてからの彼は見るに耐えないものでした。愛というものは素晴らしいが時には残酷なものだと痛感させられましたよ。彼を信じていたからこそ婚姻を許したというのに」
「異性に情欲を抱くことなかれ……俊一とやらはその点は大丈夫かね」
「俊一君は女性が大好きですよ」
「おい、同じ轍を踏むんではないか？」
「彼はすべての人間を愛しているんです。どうしようもない博愛主義者でして狂おしいほどの優しさを持つ男です」

「博愛主義者とな。お主には一生掛かっても理解できんじゃろうな」
「はい」
　サンドウィッチを遠慮なく食べつつ清清しいまでに博愛主義者ではないことを認める。
「いつごろにワシの元に連れてくるのじゃ」
「まもなくお連れいたします。焦る必要はございません」
　タケルは腕時計を見る。壁時計よりも三分進んでいる。
「すいません御大。ちょっと野暮用がございます」
「訊きたい事は訊いた。もう行ってくれても構わんよ」
「ありがとうございます。最後に重要なことをお聞きいたします。至急私に由美さんの携帯番号を……」
「教えんよ」
「ぐう、それならアディオス」
　タケルは部屋を出て行く。例のごとくエレベーターを稼動させ階段を早足で駆け下りその途中で運転手に携帯をかける。車より先に乗り場へと着くとしばし待って白いセダンがタケルの前に止まる。
「三十時間待ったよ」
「申し訳ありません。どうぞ」
　タケルが後部座席に乗るとセダンは颯爽と通りへと躍り出た。

息子

午前二時——草木も眠る丑三つ時、ヤモリと薔薇と蝋燭を……は昔見たアニメ。岡田はまだ布団に入らず部屋の模様替えを楽しんでいる。

この男はマメで家事をそつなくこなす為、かえって彼女を必要としない。

コンコン——

アパートの玄関をノックする音が聞こえる。真夜中の客人が現れたらしい。

コンコン——

間を空けず催促するかのごとくもう一度客人はノックをする。誰なのかは見当がつかない。

「どちら様ですか」

覗き穴から外を確認すると、まだ二十代と思しき黒いスーツに身を包んだ男がドアノブあたりに視線を向けて立っている。

「どちらさまですか」

もう一度、岡田がノックに返答をする。

「夜分にすいません。私はダイワと申します」

黒いスーツの男は澄んだ声で自らの名を名乗った。

「なんの御用でしょうか」

「一条雄治様の使いで参りました」

「一条？　そんな方存じませんけど」

「親不孝者ですね。お父上の名前をお忘れとは」

「私の苗字は岡田です。きちんと表札にも書いてあるでしょう」

「それは母方の姓ではないですか」

岡田は警戒心を強める。

「あなたは一体何者ですか？」

「田舎者です」

「くだらない冗談はよしてください。私を連れ戻しにきたわけですか？」
「いえ、別に」
自分を連れ戻す以外に何の理由があって私に会うというのだ。とりあえず岡田は玄関を開けた。
ずいぶんと華奢な綺麗な顔をした優男で万が一のことがあってもこちらが力ずくで制圧出来そうである。
「立ち話もなんでしょう」
客人であるダイワと名乗る男が言ってくる。
「どちらが客なんだか」
あきれた口調だが岡田の表情は緩んでいる。この男は不思議なオーラを纏っている。岡田の母は代々霊媒体質の家系で女性に能力が受け継がれているが岡田自身も異様に鋭い直感を備えている。
「そうですね。お入りください」
真夜中に来た初対面の客を部屋に通すことのリスクは承知しているがダイワの持っている雰囲気が岡田の判断に影響を与えた。
「どうぞ適当に座ってください。お茶入れます」
「お構いなく。すぐにお暇させていただきますから。玉露ください」
「そんな高価なものはうちにはありません」
「その棚の奥から二番目の茶筒の中にあるでしょう」
ギクリ……なぜ？
「あなたの趣味でしょ。高級茶の収集は」
「なんとも参りました。どうしてそこまでご存知でらっしゃる」
「勘ですよ」
岡田は思わず吹き出してしまった。そんなわけあるはずがない。しかしこの男はなんとユニークな男であろうか。いままだ出会ってきた人間とはまったく違うどの種類にも分けることは出来ない。上手く表現できないが格が違うとでも言うべきか。
「佐吉のまねでもしましょうか？」
「ぬるく多く、やや熱く半分くらい、熱く少なくですね。でも残念

ですが私は猫舌でしてぬるく多くを三杯所望いたす」
「畏まってござる」
岡田はダイワの希望通りにぬるめのお茶をいれ、ダイワの前にその湯飲みを置いてから台を挟んで対面に座る。
ダイワは勢いよく一気に飲む。高いのだからもう少し味わっていただきたいものだ。
「くぅ、旨い！　さすがは玉露ですね」
「熱いほうが香気が出ておいしいですよ」
「いえ、猫舌だからこれでちょうどいいです。結構なお点前で」
「それはどうも」
二人は礼を交わす。
顔を上げるとどちらも笑顔になっていた。旧友の再会のよう涼やかな風が吹く。
「信繁さんはいい大人になりましたね。喜ばしいことです」
「久しぶりに会った親戚じゃないんですから」
「何度かお見かけしてるんですけどね。私の顔が特徴ないから忘れてるのでしょう」
はて、まったく覚えがない。しかしこの男が嘘をついているとも思えない。
「覚えてらっしゃらないのも無理はございません。いまは昔の話ですから」
脳を巡るましく働かせても男の顔を照合できない。
「そうですか」
「それでいいのですよ。むしろそちらのほうがよろしいとも言えます」
ダイワは湯飲みを岡田に差し出した。次の一杯の催促である。
岡田はその意を汲み取り二杯目の煎茶をやや熱めに香気を出すように丁寧に入れる。
「あなたは誠にお母様にそっくりですね。その所作、横顔、佇まいはお母様そのものです」

「私の母を知っている？」

そんなはずはありえない。

「よく可愛がっていただきました」

この男ますます不可解である。母は岡田を産んで間もなく他界したと父から聞いている。今からおよそ三十年前である。

しかしこの男はどう見ても二十代にしか思えない。

「ほう、母が可愛がってくれていたのですか」

「ええ、とても美しい女性でし儚い命の方でした」

にわかにダイワの左右の瞼の端から一筋ずつ涙がこぼれ頬を伝い彼のはいているズボンに吸い込まれていく。嘘やはったりでなく、岡田の母を知っていることが真実であるかのごとく情を表した瞳をしてダイワは岡田を視界の中心に据える。

「ダイワさん……あなたは私を連れ戻す気がないようですが、もし父の元に私を帰せばいくらでも父はあなたに礼金を支払うでしょう」

「私は金に興味はありません。不自由しない程度には持っておりますしね」

「ではなぜ私の家にわざわざ来られたのでしょうか？」

「あなたの成長を確認しに来ただけですよ。他意はありません」

「どうやってこの家を突き止めたのです？」

「勘ですよ」

「答えになっていません」

「答えるつもりはありません」

「あなたの真理が私には理解できかねます」

「私が分かればいいのです」

ダイワは三杯目を所望する。岡田は目一杯熱く、湯飲みから溢れんばかりに玉露を注いだ。

「約束の三杯目です」

「馳走になろう」

ダイワはぬるいお茶と変わらず、グイグイと一瞬も止まることなく一気に熱い玉露を飲み干した。

「やっぱりお茶は香気を楽しむものですね」
「猫舌ではなかったのですか？」
「うん、ホントは熱いのが大好き。でもほら」
ダイワが舌を見せると火傷している。
「熱すぎましたね。すいません」
「いいですよ御気になさらず。私は外傷では死にませんから。さて、三杯いただいたことですし、そろそろお暇させていただきましょう。雄治氏には内緒にしておきますのでご安心を」
「そうしてくれると助かります」
「私の言葉の八割は嘘で出来ていますけれど。それではアディオス」
ダイワは玄関へ向かいさっさとドアを開け帰っていく。岡田が後姿を見送ろうを数秒後に後を追ったがすでに道には人影ひとつなかった。
なんだか狐のつままれたようなもやもやが彼の胸に残った。

殉職、筑紫のくににて

殉職

議場では二人の男が言葉のやり取りをしている。
一人はこの国の現首相である大藤誠一郎、もう一人は野党第一党の党首千田克也。いわゆる党首討論という一種の暇つぶしに興じているところである。
いつものごとく千田は政府および与党の揚げ足取りに終始し建設的な意見、対案を出さずに退陣して政権を明け渡すことを要求する。それに対して大藤は理屈になっていない摩り替え論理を駆使してオーバーアクションで答弁をする。
これが国権の最高機関で行うべき代物であるのか甚だ疑問である。もう厭わしくて、嘆かわしい、この者たちが母国の最高権力者たちなのかと。いつの時代も庶民は生きるために精一杯働いて時を歩んでおり、政治を深く考察する時間など持ち合わせていない。
だからこそ政治家たちはその職分として政治を全うしてもらいたい。科学は進歩しても政治は退化しているようだ。
千田が険しい顔と怒りを演出した口調で大藤に献金問題について意見を伺い議長が大藤の名を指名すると例のごとく大げさに大藤は…………答弁をしない。
椅子に腰をかけたまま目を瞑ってピクリとも動かない。
「大藤内閣総理大臣」
議長がもう一度指名をするが大藤は反応するそぶりすらない。またいつものパフォーマンスなのかと野党の議員たちは野次を飛ばし始め中継のマイクがその声を拾う。とても子女のは聞かせられない、大人の人間が公の場でにおいてはばかるべき言葉が幾種も全国の茶の間に届く。しかしそれでも大藤は微動だにしない。
さすがにおかしいと議場はざわつき、しばらくすると野次も止ん

で議場が静まり返った。みなが困惑している最中、一人の男が大藤の下に駆け寄る。同期に初当選をした八潮官房長官だ。
八潮がなにやら言葉を投げかけるが相変わらず大藤は目を開きもしない。
「医者だ！　医者を呼べ！」
脈を取る仕草をした八潮が叫びその声が議場に響き渡った。

筑紫のくににて

「京都の一条様とゴルフをなさったそうですね」
「一年ぶりにな」
「チョコレートは賭けていたんですか？」
「ああ、片手いかれた」
指を開いた右の手のひらをダイワに見せる。
「五百万？」
「五千万だ」
「それはまたお気の毒に」
「心にもないことをよく言うよ」
「あはは」
「あの野郎、ハンデは三十でいいかと抜かしやがった。断るところを承知しておいてな」
「素直にもらえば良かっただけじゃないですか。いい年なんですよ。昔なら人間五十年で死んでいる年なんですよ」
「あいつだけには意地があってね」
「くしくも同い年ですしね」
「誕生日も一月違いだし一から十まで比べ続けられてきたからな。そういえば去年負けたときに持っていかれた掛け軸、後日高橋君に話したら絶句していたぞ。アレは国宝級のモノだそうじゃないか」
「それは災難でしたね」
「お前は知っていたんだろ。お前があいつに勧めたときに疑ってお

けばよかったよ」
「後悔先に立たず。私には審美眼がありません」
「とぼけるなよ」
「うふふ」
「今回の負け分の半分で勘弁してやる」
「里奈ちゃん。お茶」
「はい」
「今日も綺麗だね。クレオパトラも嫉妬するよ」
「ありがとうございます」
「あと羊羹もね、よう噛んで食べよう」
「おい、人の話はきかんか。お前はいつも緊張感がないな」
「そうだ、テレビ観たくないですか？」
「何だよ急に話のつながりがないだろ」
ダイワは無視してテレビのリモコンを操作する。雄治は呆れ顔だ。
画面では緊急特番が放送されていて司会のアナウンサーの下に新しい原稿が届けられている。普段はどんなニュースでもポーカーフェイスを崩すことのないアナウンサーの表情が険しくなり横を向いて原稿の内容の間違いがないのか確かめる。
「最新情報が入りました。大藤首相はお亡くなりになった模様です。繰り返します、大藤首相はお亡くなりになった模様です。詳しいことは八潮官房長官が記者会見で発表するとの事です」
アナウンサーの後ろに映っているスタッフたちは慌ただしく動き回っている。すぐに大藤がなくなったことを知らせるテロップが流れた。
「なんてことだ！」
「やった」
「なに？」
「大成功です」
「説明しろ。どういうことだ」
「大藤さんはあの世に旅立ったということです」

「お前、また何かやらかそうとしているのか」
「はい。というかこれが本来の私の仕事なんですよね。ダイワタケル最後の大仕事です」
「なぜ大藤を殺したんだ」
「いらないからですよ。それだけです」
「大藤のバックは俺らなのは知っているだろう」
「いらない駒は捨てるのみ」
「九条の御大は知っているのか」
「シュアー」
「大藤は尊大なところもあるがこの国には良く尽くした人間ではないか」
「そうですね」
「我々とは縁戚にあたる」
「わかってますよ」
「それをあっさり殺し、見捨てるのか」
「死因は癌です」
「癌ということにするのかね」
「癌なんですよ」
「では奴の重病説は事実だったのか」
「いや、重病説に乗っかっただけです。その方が何かと都合がいいのですよ」
「なんの都合だ」
「選挙です」
聞いてみればなんの捻りもない答えが返ってきた。
「どう転んでも、もうすぐ任期満了で選挙があるわけです。今回は前回と違って地滑り的勝利は不可能です」
「普通に考えればそうだわな」
雄治はお茶をすすり、おかきを口の頬張った。
「万が一とはいえ与野党逆転という事態も想定できるわけです」
「難しい課題は山積だが可能性はあるだろう。念のために千田には

金は掴ませておる」
「しかし私たちにはこのままの政権が何かと気楽でしょう」
「そうだな。あいつらには宗教団体が影響を及ぼしすぎている」
「だから一手を放ったんです」
「任期中に総理が死んだ場合は与党優位が動かないということか」
「その通りです。シンプルですが効果抜群の必勝法です」
雄治はダイワの魂胆は理解できたが同時にこの男の非情さも再確認できた。
「しかしね。大藤の命と引き換えにするのは危険な賭けではないのかね」
「種がバレたら大変ですね。でもそれが楽しいじゃないですか。生きてるって実感が沸きます」
ダイワは無邪気な笑みを見せる。
「これから忙しくなるぞお」
「随分と活き活きしているな」
「勝負が掛かっているんです。もう私には後がないから燃えないわけがない。ちなみに『もえ』は草冠に明るいではないです」
「なんだそれは」
「分からないならいいです」
「うむ、分からん」
「未来のことは誰にも分からない。だからこそ生きることは楽しいんです。あっ、里奈ちゃんカッフェのブラックをお願い」
「かしこまりました」
「ダイワ、お前の頭の中を一度診てみたいよ、どうなってるんだか」
「自分でも怖いから私はＣＴやＭＲＩを撮ったことは一度もありません。けへへへ」
「薄気味悪い声を出しおって」
コーヒーがダイワの目の前に運ばれてくる。
「ちょっとブレイク。コーヒータイム」
そういいながら熱いコーヒーを喉に流し込む。これはブレイクと

はいえない。
「そういえば雄治さん。息子さんの居場所は分かりましたか」
「お前は分かったんだな」
「説明要らずで助かります」
「いきなり話を振られれば中学生でも気づくぞ。どこにいるんだ」
「近いようで遠くといいましょうか。心の距離ほどは離れてはいません」
失礼な物言いであるがダイワが言うと不思議と怒りがこみ上げることはない。
「様子はどうだ。身体は大丈夫か？」
「元気でした。彼は今アルバイトで生計を立てています。もう少し待っていただければ雄治さんの望みの結果が訪れるでしょう」
「そうはいってもな、待つ身ほど辛いものはない。信繁はワシのたった一つの希望、桜との愛の結晶なのだよ。ワシは京の一条や九条の御大と違って桜以外に目をくれたことはない。そしてそれは仮の世を去った今でも変わらない」
「素晴らしいことです」
「だから一刻も早く会いたいのだよ。分かってくれダイワ」
雄治はダイワの瞳に強い意志の視線を送る。
「それはなりません」
ダイワは雄治から目を逸らす。
「信繁様はいま一人の力で生きています。炊事、洗濯、家事、オナニーすべて一人でこなしております。もう彼は立派な大人です、いつまでも雄治さんの雛ではないのですよ。信繁様の人生は信繁様のもの。例えあなたが親だとしても……いえ、親であるからこそ巣立ちを見守ってあげてください」
「ダイワ、お前の口にしたことは筋は通っている。しかしな、愛とは理のみで成り立っているものではないんだよ」
「承知しております」
「待たないのだよ」

「信繁様は大変な才覚をお持ちの方です。自分の生きる道を見つければ自然に一条の家にお戻りになられるでしょう」
雄治は涙が零れ落ちないために天井を向いている。
「これをお使いください」
ダイワがスーツのうちポケットから白のハンカチを取り出し雄治に差し出す。
それを受け取った雄治は涙をぬぐいついでに鼻までかんだ。
「洗って返そう」
ハンカチを里奈に渡す。すぐさま里奈は部屋を出て行き、代わりのハンカチを携えて戻ってきてダイワにそれを渡す。
「サンキュ」
ダイワは里奈にVサインを送る。いまどきめったにVサインはお目の掛かれない。
テレビの画面ではそれまでの大藤の経歴、実績が映像とともに電波に乗せられ全国に届けられていた。
わが国は死人に鞭を打つことを嫌悪する傾向があり、VTRでは功の部分ばかり取り上げられ、罪の部分は言葉を濁す。
これで与党は遠慮なく議会を解散し総選挙に打って出るだろう。
「忙しくなりますね」
「次の指導者は誰に決めているんだ」
「知りません」
「選挙に強い野沢君辺りか」
「それはどうでしょうかね」
「向こうから打ち合わせに来るだろうが、お前は誰だと思う」
「与党以外の人間になりますよ」
「どうしてだ？　お前は与党を勝たせるために大藤を捨てたのではないのか？」
「違います」
「我々は一貫して自由国民党を支持してきた。民衆党に乗り換えるつもりかね」

「それも違いますね」
「じゃあ、なんだ」
「第三の選択。今いえるのはここまでです。とはいえ国のリーダーを決めるのはあくまでも個人個人の判断の集結です。私にも確信はありません」
「第三の選択……三文芝居の題名みたいだな」
「これが私の最後の仕事です。それではアディオス」
ダイワは帰り支度を整え玄関へと歩く。
「里奈ちゃん、またね」
門まで見送りにきた里奈に笑顔を振りまき、門の前で待機していた車に乗り込むと間もなく車はタイヤを駆動させる。

「山口君、万年筆」
車が走り出して五分後、それまで黙っていたダイワが運転手に話しかけた。
「どうぞ」
今走っているのは街中の大通り。信号につかまり停車したとき山口はダイワに胸に挿してある万年筆を渡した。
「ありがとう」
ダイワは受け取った万年筆をキャップをはずすとその尖った先端を右の太ももに突き刺した。
山口は何事もないように信号が変わるのをじっと待ち、ダイワはうめき声一つ上げない。太ももから万年筆を抜くとじんわりとズボンに血がにじみでてくる。
「まだ死なない、私はまだ死なない。私はまだ生きている」
自己暗示をかけているとしか見えない。信号が青に変わると車は再びアスファルトを走り始める

競馬場にて

「おい津島、お前明日非番だったよな？　馬券買ってきてくれないか」
先輩の前田の命令でジーワンというレースの馬券を買いに行かされるはめになった。もちろん津島に断る権利は存在しない。
「交通費は支給してやっから」
当然の事だが恩着せがましく言う。
「ありがとうございます」
とりあえず礼を言って先輩の言うことに従っておけば自分に不利になる事態は訪れない。前田は買い目と交通アクセスを書いてあるメモと交通費と昼飯代を津島に手渡す。

翌日
前田のメモどおりに地下鉄から電車へと乗り換え久しぶりに電車からの眺めを満喫する。とはいっても田舎の風景しか目に触れず都会から離れることを意識させられるだけだし。
彼は小学校時代の疑問を思い出していた。
『どうして場外馬券売り場は反対運動が起こるのにパチンコは駅前で堂々と営業しているのだろう』
年をとるとからくりは見えてきたが所詮はからくりでやはりパチンコはギャンブルのくくりでありそれを認めるのなら、いわゆる三店方式を別のものにも流用すべきだと考えている。
闇に潜るより表で認めてしまえばあからさまなどうもと有利の賭博場は客の取捨選択によって淘汰されるだろう。
五十二分で前田のメモに記されている駅に電車は到着し津島は乗り合わせた多くの客と共に降りていく。新聞を持っていた人はこれが目当てだよな。

駅から出ると無料のシャトルバスが所せしと並んでおり次から次へとみんなが乗り込む、津島は駅の景観を写メで撮影し一台目を乗り過ごしてから二台目のサッカーチームのロゴが側面に大きく貼り付けてあるバスの乗り込んだ。五分も掛からず競馬場に着くと驚くほどの人ごみである。

人の流れに逆らわぬようにと入場口に向かっていくと慣れた手つきで皆がコインゲートに硬貨を投入し入っていく。津島も見よう見まねで硬貨を入れてまた人ごみに合流して前を歩く人に着いて行くとやがて津島の眼前には緑の絨毯が広がっていた。

「こいつはすごい」

誰に言う訳でもなく自然に言葉が飛び出した。

現実世界にある非現実の世界。大袈裟な言い回しだが緑の絨毯を駆ける馬の美しさに津島は心奪われた。小説で読む鉄火場のイメージとは程遠い洗練された空間は彼にインパクトをもたらしている。サラブレッド――その走るために血統を積み重ねてきた馬たちは独特のオーラを身にまとい芝を疾走し、砂を蹴り上げ砂塵の幕を張る。勝つことによってのみ種を残すことが許されたエリートたちの競演がそこにはある。今は四レース締め切り五分前。駅の売店で調達した競馬新聞に目を通すと五番の馬に二重丸が固まっている。ここは一つ景気良く当てておこうと津島は三着までに入れば当たりという複勝馬券を購入した。目印は赤い帽子とゼッケン。

ファンファーレが鳴りゲートが開くと十六頭にの馬たちが一斉に飛び出しポジション争いを始める。

ダッシュ良く五番の馬が先頭に立ち後続馬にどんどんと差をつけていく。

「強いなあ。五番」

素人考えである。

五番の馬は折り合いを欠いているのだ。スタート直後から騎手は腰を浮かし位置取りを下げるアクションを起こしたが徒労に終わり

三ハロン過ぎには馬に任せて空気抵抗の少ない騎乗体勢になった。
　ほら見てごらん。四コーナーを回るころには五番の馬の手ごたえが怪しくなり騎手が両手で馬をしごく。直線何とか粘って四着は展開を鑑みれば上出来であったとは言える。かくして馬券はただの紙切れとなった。
　しかし津島はというと馬券をはずしたことなどまったく意に介しておらず呆然を四肢を躍動させる馬たちに見入っていた。

「どうしました？」
　不意に津島の右から彼に話しかける男の声が耳に届いた。
　反射的にそちらを向くと濃紺のスーツを着こなしている二十代と思しき男が立っている。
「いいえね、感動してました」
「馬は綺麗ですよね。存在そのものが美しく芸術的です」
「そうですね」
「人は打算で動くが馬は本能で動く。私の持論です」
「いい言葉ですね」
「私もそう思います」
　男は子供っぽく笑う。
　この男はなんという雰囲気を醸し出しているのか。初めて会ってのに旧友との再会のごとく心が落ち着き安心感があって津島の胸の扉を開放させている。今まであった人とはどこかが何かが違う。
「いままで競馬を知らなかったのが勿体無かったですよ」
「私も始めて競馬を見たときは感動したものです」
「どれからいってました？」
「五番の馬です。複勝を買ってました」
「いくらやられました？」
「一千万」
　千円の外れ馬券を男に見せる。
「それは随分痛いですね。家を処分しないと」

「給料日までカップラーメン暮らしでしのぎますよ」
「失礼ですがご職業は？」
「自衛……公務員です」
「いいですね、安定していて」
「しがらみばかりの苦労する商売ですよ」
「何かあれば叩かれますからね。お国にご奉公していると言うのにね。私は自営業をしております」
　男はころの長財布から馬券を取り出し津島の視界に捉えさせた。単勝当たり馬券五万円一点買い。配当金は２９８０円
「百五十万円！」
「声が大きいですよ」
「すいません。つい」
「今日はツキがありましてね。お昼はまだですか？」
「はい」
「私に奢らせてください」
「いいんですか。初対面なんですよ」
「お金は使ってこそ価値があるのです。奢らせてください」
断りづらい言葉を男は選んできた。そう言われるとお言葉に甘えるしかない。
「では、おごってもらいます」
「はい、了解」
　男は敬礼をした。
(たまたまだよな)

　他愛もない世間話をしながらお昼時の食堂へと二人はやって来た。予想通り混み合っている。
　しばらく様子を伺うと奥にある四人がけのテーブルの客が会計をしに立ち上がった。しかし、人ごみでそこまで行けそうにない。
「ああ、あそこが空きましたね」
　ちょっと待って……男はずかずかとそこへとまっすぐに歩いて行

く。まっすぐに、ただまっすぐに誰も交わすことなく。

「あ……れ？」

男は誰にも触れることなく奥のテーブルにたどり着き何事もなく椅子に腰を掛ける。

「津島さん。はやく」

冷静に考えるとなぜこの男は津島の名を知っていたのだろう。

「津島さん流れに身をまかっせればいいんですよ。時の流れに身をまかせっってね」

何人にもぶつかりつつ、ようやくたどり着いた津島に向かって言ってきた。椅子に座ると額から汗が滴り落ちてくる。

「なにを食べましょうか。遠慮なさらないでくださいね」

「儲かったら使いませんとね。持っている人間が出し惜しみしていては景気は良くなりません盛大に使いましょう」

食堂で言う発言にしては大風呂敷だ。

「えび天うどんにします」

「はい。了解」

また男は敬礼をする。

「おねーさん」

男は食堂のおばさんを呼ぶ。

「えび天うどんのエビ四本入り二つとそれ以外のうどん全部ね」

「えび天トッピング二匹二つと他の種類のうどん全部ですか？」

「はい。そうです」

「全部？」

「うん！」

おばさんは怪訝な顔をしながら注文を調理場に伝える。

しばらくすると注文通りの品がテーブルに並べられた。

「あとこれが食べ終わったら同じトッピングのそばもお願いしますね。ではいただきます」

男はうわばみのごとく、うどんを飲むように平らげってしまった。ものの十分くらいか。
津島は自分が食べ終わるとその光景をじっと見ていた。周りにいた客たちも注目をしている。
「おかわり」
そういうとそばが全種類運ばれテーブルに並べられる。
「いただきます」
つるつる、スラスラスラ……
「ごちそうさまでした」
そばもすべて胃の中に納めてしまった。
「すごいですね」
「ん？　まだまだこれからですよ。おねーさん丼物全部」
ここまで来ると店中の視線はこのテーブルに注がれている。この男はどこまで食べ続けるつもりなんだろう。一緒にいる津島もこそば痒く恥ずかしい。
「はいどうも」
丼物も食べつくしてしまう。その決して太いとはいえない、むしろか細い身体の何処に食べ物は入っているのだ。津島はヤマタノオロチをなぜか頭に浮かべた。

「なんだか目立っちゃいましたね。ここでお開きとしましょうか」
二人は会計を済ませて外に出る。
「びっくりですよ。どこに食べ物は入っていくんですか？」
「四次元ポケットです。あのくらい朝飯……いや夕飯前ですね昼飯だけに」
笑えない。
「それにしては痩せています」
「太らないタイプですからね」
「うらやましい」
「今までお腹いっぱい食べたことはないんですよ」

「それまたどうして」
「満足するまで食べてしまうと食欲を無くしてしまいそうでね。おかしいでしょ」
男はにやりと微笑みかける。
「おかしいですね」
津島も微笑がえし。
「そういえば先輩に頼まれていた分は買いましたか？」
なぜそのことを男は知っているのか。津島がこの男に何の疑念も抱いていないのはその雰囲気と話のもって行き方が自然であるためである。
「そうでした」
「何を買うんですか？」
「一番の馬からの馬連です」
「それは残念です。ハズレです」
自信たっぷりに言う。
「その馬はね、調教の時の脚の捌きが去年より硬くなっています。信用できません。ノミましょうか？」
「ノム？」
「買わずにそのお金を懐にそっとね」
「出来ません」
「そういうと思いました。よかったです」
「バレたら洒落に成りません」
「バレなければいいでしょ」
「駄目です」
ここはきっぱりと断った。
「あなたは使える」
男は小声で言ったので津島にはその言葉が聞こえなかった。
「いまなんて言ったのですか？　もう一度お願いします」
「はい。了解」
三度目の敬礼。

「十五番の馬の単勝を買ってみてください」
「十五番ですか十五番……」
さほど印は打たれていない。
「自分の持ち金全部賭けるのはあなたの勝手でしょ。私を信じるか信じないかはあなたが決めることですけどね」
オッズは現時点で三十倍見当。穴人気といったところ。
「私はもう買ってありますよ」
男は財布から十五番の単勝馬券を取り出した。
「人生は一度きりの遊び。どう生きるかは自分自身で判断するべきです」
この男を信用しないという選択肢はいつのまにやら津島の頭の中から抜け落ちている。
「信じるとしましょう」
津島は帰りの交通費を残して全額十五番の単勝を買うことを決め窓口へと向かった。
「アディオス」
津島の後ろ姿に別れの言葉をかけて男は去っていく。

「何処に言ったんだ？」
馬券を買い、戻ってきた津島は独り言をつぶやく。あの男が何処にも見当たらない。
もしかして嵌められた？
でも男に特になることはない。俺は幻にでも会っていたのか？
しかし数時間後の帰り道、津島の財布は札束で溢れていた。そして津島が自宅のマンションに帰り着くとベッドの上に一通の封筒が置かれていた。

ピンポイント病死

解剖の結果は肝硬変。その筋者の男の死因には不可解な部分は微塵もない。

「どうしてこう大里組の奴らばかりが死ぬんだろうね」

河原秀治があたりを見回すが誰もその問に答えない。

「呪われているのかね。そんなモノは信じたくはないが、こうまで続くと偶然とはなかなか言いづらい。なあ、柴戸君」

「おっしゃるとおりです。しかし解剖結果から申しましても持病の悪化が原因であり疑念を持つ理由はありません」

「単なる病。道西会の連中は笑いが止まらんだろうな」

道西会とは大里組と対立している組織である。元々は大里組は道西会の一内部組織であったが跡目争いの折に分裂し、大里組のヒットマンが道西会の新会長となった孫田真大を床屋において射殺し抗争に至っている。

今日解剖した男は大里組のナンバー3、塚原清であった。大里組の金庫番にして武器、麻薬調達の要で知事とは大学時代の同期である。

「これで大里組は終わりだわな」

河原の言うとおりこの組織はもはや立ち直ることは出来ないだろう。大里組の組員はこの一ヶ月で多くが病死。警察が動こうにも持病が死因なら動けない。

「ある意味奇跡だわな」

「なんか釈然としません」

「しかし、疑う根拠は一つもない。ちょっくら一服してくるわ」

河原はオペ室を出て休憩所へと向かった。柴戸は死体をもう一度丹念に診てみるが特に際立った外傷はなく不自然な注射痕もない。遺族の話によるとにかく酒を好んだという。入院歴もあるが改めることはなく、いつもおお酒をかっくらっていたらしい。自業自得

の見本だ。
「よっぽど不摂生せんとこうはならんわ」
河原の一言ですべてが納得いくほど肝臓は蝕まれていた。
一服を終えた河原がオペ室へ帰ってくる。
「おい、面白い人から電話があったぞ。ここに来るらしいわ」
「まさかマスコミの連中じゃないでしょうね」
柴戸はまゆをひそめた。
「はずれだ」
柴戸は安堵した。記者たちがこの事実を知れば面白おかしく書き立てるだろう。ヤクザとはいえ、死んだ人間をどうこう言うのは柴戸は人として卑しく下品な行為であると思っている。
「神様が来るんだわ。出迎えるぞ」

二人が病院の入口の前で待っているとタクシーから一人の男が降りてこちらへと歩いてきた。
色白で濃紺のスーツを着た男。
「麻風先生お待ちしておりました」
普段の横柄な口調からは想像つかない丁寧な言葉が河原の口から発せられた。
「はじめまして。河原先生の名はよく耳にいたしております」
「いえ、麻風先生には及びません」
麻風……といえば、医学会の重鎮の麻風蒼司を柴戸は思い浮かべた。めったにある苗字であるわけではないし、年齢からすると……麻風遼。彼は麻風遼なのか？　なんとまあ随分と華奢な男である。
女形のような顔に白く澄んだ肌、煌めくほどの黒髪、そして何よりもすべてを包み込みそうなオーラをこの男は身にまとっている。
一見すれば只者ではないと愚鈍な人間にも容易に分からせるだけの説得力がある。
当代一の技術をほこると称されている彼はいま大学病院を出奔し全国を回っていると噂されている。

「鰻が食べたくなりましてね。朝一の新幹線でこちらへと参りました。さすが本場の鰻はとても美味でしたね」
生き仏という単語が包容力のある遼の笑を見た柴戸の頭に浮かんだ。
「なんでも最近、暴力団員が続けた亡くなってらっしゃるとある方から伺いまして、こちらへ伺わせてもらいました」
「はい、大里組という組の構成員がこの一月で三十人亡くなっておりまして、今日も一人おなくなりになりました」
河原がこんな年下の若造に気を使った物言いをしている姿は滅多に見られる光景ではない。
「ほう、それは珍しいですね」
遼が目を細めるとその恐ろしいまでに長いまつげが強調される。
「麻風先生、ここで立ち話もなんですから応接室へ行きましょう」
「診断結果のコピーを見たいのですが」
「おい、柴戸」
「承知しました」
柴戸は一足先に院内へと足を進めた。

遼と河原は第一応接室に着き入っていきソファに深く腰をおろす。
「近頃、ドクトルジャックというのがいるのはご存知ですか？」
「麻風先生の口からその名が出るとは思いもしませんでした」
「たまたま、岡山でジャックの治療を受けたクランケに会うことが出来ましてね。少し身体を診せて頂いたのですよ」
「それは興味深い」
「これは旨いですね」
遼は河原の煎れたコーヒーを一口含む。
「そうでしょう。私のオリジナルブレンドでしてね。勿論企業秘密です。それで何かわかりましたか？」
「ジャックのやっていることは治療ではありませんでした。彼は違法な薬や麻酔技術の応用で患者の痛みを取り除いていただけなんで

す。治ったように偽装していると言いましょうか。人体実験とでもいいましょうか。ただその効果は素晴らしい物でその患者は死の病に冒されていながらも趣味に汗を流すことが出来ています。根本的に病気を治すことを放棄しているが患者は活き活きとしている」
「ドクターキリコとは微妙に違いますか？」
「思想は近いのかもしれません。ジャックは相当な熟練者でしょう」
「しかしマスコミはジャックの存在に気づきていないのでしょうかね。格好のネタになりそうですけど」
「理由の一つにはクランケが地位や名誉を得ている人間であることが挙げられます。病気であることを他人に悟られたくない人種です。そして死ぬまでほとんど苦痛を感じないので感謝こそすれ非難する人がいないのでしょう」
「しかし彼のやっていることは違法ではないですか」
「違法です。法律は最低限の道徳といいますからそれにもとる行為を実際行っているわけですがクランケの苦痛を取り除くことも医師の役目の一つではないでしょうか」
「しかし所謂、『治療』とはまたベクトルの違う行いであるでしょう」
「ええ、だけど人にとって死とは何か？　昔からの私の命題があります。徒に生き長らえさせるのが是が非か。家族の負担、生命倫理とはどうあるべきか。クリア出来ないことばかりです。ジャックは一概に批難できません」
「麻風先生は延命第一主義と思っておりました」
「幸か不幸か医師としてこの世にいるわけで、私もただの一人の人間であることには変わりはないのです。それに悩みがなくなるのは死ぬ時だと常日頃から考えております」
　応接室の扉を開け柴戸が書類を抱え入ってきた。
「ありがとうございます」
　礼を言う。この男には自分が稀代の名医である事の驕りなど微塵もない。哲人とは立場に関係なく儀礼や挨拶、謝意の表現などをき

ちんとするもので、河原とは違うなと柴戸は密かに思った。遼は猛烈な勢いでカルテやその他の書類を脳に焼き付ける。
「なるほど、確かに書類を見るかぎりは不審な点はないようです。持病の悪化による病死ですね。もっとも持病のない人間なんかこの世にわずかしかおりません」
「麻風先生、こうも続けて特定の人間にだけまるで狙いすました如く死が訪れるものでしょうか？　先程も申したとおり今日も一人亡くなっています」
「この世のすべては偶然の産物に過ぎない。必然とは偶然を恐れる者のいいわけである。無名の小説家の持論です」
「言いたいことは伝わります」
「そしてその無名の小説家とは私です」
遼は顔をほころばせた。
「さてと、落ち着いたことですし、今日の遺体を見せていただきましょうか」
三人でオペ室に入る。遼は身体中の至る所をメスで開き何かを確認するように頷いたり考え込んだりする。
「申し訳ありませんが一人にしていただけませんか」
河原と柴戸は言われて通りに遼を一人きりにした。
それから半日後、遼は病院を後にした。
「これからも病死者はどんどん現れるでしょう。大里組は壊滅されます。全ての人がきれいな病死でね」
という含みのある言葉を残しつつ。
そしてその遼の予言のまま、大里組の組員達は毎日のように亡くなっていく。とても確率論では語れない数学者泣かせの事象が現実世界で展開された。

虫

「成功おめでとうございます。さすがは佐志先生」
「どうも、ありがとう」
　ダイワと佐志は握手をする。白髪混じりの佐志はダイワよりも一回り大きな偉丈夫である。
「まさに絶好にタイミング。さよなら逆転ランニングホームランです」
「野球のことは詳しくない」
「かなりレアだという事でっせ旦那へへへっ」
「俺はレアでステーキは食えない」
「ひょっとしてギャグですか？大先生」
「ただのイヤミだ」
「おそ松くん？　いや、なんでもないです」
　あまり二人の中はよろしくないらしい。
「まあ、コレクションの働きは素晴らしかっただろう」
「申し分ございません。ちなみに名前はなんですか？」
「癌虫だ」
　ダイワの動きがほんの寸暇止まる。
「捻る必要があるのかね。理由があるのならレポートとして提出してもらっても結構だ」
「そのまま過ぎではございませんか」
「でた、学歴厨」
「それは日本語かね」
「霊の祈りを込めた聖なる言葉でございます」
「嘘はいい」
「私の言葉の八割は嘘で出来ています」
「俺は俺の仕事を全うしたあとは君の職分を全うしてくれたまえ」
　ホルマリン漬けの寄生虫のコレクションを愛おしげに眺めている。

「勿論、私は鬼ですから」
「そうそう、君には関係ないが、またいい虫ができたんだよ。今度学会で発表する。趣味と実益を兼ねていいだろう」
「ますます、佐志先生は権威になるのですね」
佐志は口角をわずかに上げる。
「しかしね、表に出せない苦労がたんとあるんだよ」
「表にはさせない研究でしょう」
佐志は硬い表情でコクリと頷く。
「しかし、今頃大里組は大変だろうな」
「暴力団が減って嬉しくないシチズンはいません。屑は死んでいいんです」
「物騒なものいいだ」
佐志はのどを潤すためにのど飴を口に含んだ。この部屋は密閉された無機質の空間である。
「道西会の勢いをつけるだけにならんといいがね」
「次はそっちをやりますから。またコレクションをお借りいたしたく存じます」
「人のものだと思って」
「はい！」
「良い返事だ」
「持病を悪化させる細菌なんてどうやって創ったんですか？」
「理屈を説明したってわからんだろう」
「それは否定することは出来ません」
「では道西会の連中には肺がんで死んでもらうとしよう」
「首相から暴力団までほんとにお疲れ様です。細菌が。暴力団がヤクザなら消さなくても済むんですが彼らは踏み越えてはいけない領域を超えてしましました」
「大藤と屑を同列に扱うなよ」
「目方は同じ生命でしょう」
キリッという効果音が聞こえそうな顔で言う。

「青臭いことを」
「以前観たヤクザ映画からパクリました。自分の舎弟の仇を取りに行く主人公が言うんですよ」
「今時そんなヤクザがいるかね」
「いるという自信はありませんがいないという確信もありません」
「俺もそうかね」
「よおし、がんばるぞー」
「仕事をするのは俺のコレクションだ」
「またお願いしますよ」
「大里組の連中には会合の席で仕込んだそうだが今度はどうするつもりかね」
「同じやり方で始末します。Nという街のナイトクラブ『初雪』で集まりがあるそうです」
「一体どうすればそんな情報が入ってくるのかね」
「そこは若頭の愛人の店なんですよ。その愛人を虜にしてましてね。閨で伺いました」
「ヤクザの女に手を出すとは命知らずだな」
「私を殺すことは誰にもできませんから。では虫をいただきましょうか。肺癌を誘発する虫の名前はなんですか？」
「肺虫だ」
「お菓子？　これまたそのままのネーミングですこと」
「人に聞かせるものではないのでね」
「さっそくいただくとしましょうか？　タブーはなんですか？」
「八十度以上の熱に1時間晒されれば死滅する」
「アルコールは大丈夫な仕様ですね」
「そのとおり」
佐志はもう一つ所有する、同階にある一室へと赴き液体の入った茶色の瓶を持ってくる。そしてそれを紙袋に収めてからダイワに渡した。
「ではでは、失礼いたしました。いつかまた会いましょう。アディ

オース」
ダイワはとてつもないスピードで階段を駆け下りていった。
「せっかちなやつだ、まったく。生き急いで何になるんだか」
佐志は呆れるやら感心するやら……。

ほぼ同時刻
道西会の本部事務所前に一人の男がやって来た。見た目はごく普通の、顔色のやや青ざめた若者である。
「あんちゃん。ここが何処か分かっとるんか？　ケツの青い奴の来るとこやないぞ」
いかにもそれ風のなりをしているサングラスにヒゲを生やした男が高圧的に男に対応する。事務所内の監視カメラにその男が捕らえられていたためだ。
「組長からいただき物をもらったお礼のために伺わせていただきました」
この若者は怖めず臆せず答える。
「何を寝ぼけたことを言うんや。お前みたいなしょぼくれに親分が相手する訳ないやろうが」
どすを利かせた低い声で言う。
「あなたではお話になりません。誰か他の方はいらっしゃいませんか？」
「なんやと！　なめんなこの野郎」
感情を顕にし普段の甲高い声に男は戻る。
「失礼があったなら申し訳ありません」
若者はスッと頭を垂れる。
「その話し方が気に食わんのや」
「そういう育ちですから」
「うっさいわ坊主。さっさと失せんか」
「どうして貴方達のような人種はすぐに怒鳴るのでしょう？　損だと思いますよ」

瞬間、髭の男の右手が若者の襟をつかもうと伸びてくる。
だが若者は一糸も触れさせることなく男をかわし、前に体重をかけていた男は玄関のドアからつんのめるようにしてコケて体ごと玄関前に茶色のタイルに頭から突っ込んだ。追撃の一撃を加えられ髭の男は仮りそめの世から黄泉の国へと旅だつ。
そして玄関から若者が入っていくと、中にいた十数人の男達が匕首や拳銃を構え待ち構えている。
「銃刀法違反出すよ」
若者はツカツカと一番近くにいたスキンヘッドの男の元へ歩み寄る。
「あなた人を殺したことないですね」
「なっ！」
「平次、殺ったれや」
「いけ、行かんか」
周りの男達がはやし立てる。
「てめえで童貞卒業や」
息巻いて襲いかかろうとするが男の身体は自由を奪われていた。まるで金縛りにあったかのごとく身体が固まり脳の命令を聞き入れない。若者はヒョイと匕首を取り上げ男の心臓に突き刺した。おびただしい血が男の体から溢れ絨毯を朱色に染める。
「我は神の子なり。殺されることは名誉である」
次の日のローカル新聞の一面は道西会本部が何者かに襲撃され壊滅させられたことを伝えていた。

「あははは」
その記事を見て若者は勝利に酔いしれ高々と哂う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3204t/

継承の鬼

2011年6月1日22時25分発行